コヒーレント軟 X 線を用いたイメージング

高エネルギー加速器研究機構 小野寛太

共同研究者

装置開発·実験: 東大物性研 谷内敏之 小谷佳範

実験計画·解析 東大新領域 百生敦 矢代航 Sebastien Harasse

試料作製:	東北大金研	水口将輝
	東北大工	角田匡清

謝辞

東大アウトステーション 東大物性研 山本達、藤澤正美、松田巌



- 装置の概要
- ・BL07LSU でのコヒーレンス測定 (2010.02.15~16)
- ・コヒーレント軟X線回折顕微鏡テスト実験 (2011.02.01~03)
- 今後の計画

コヒーレント散乱イメージング装置



SPring-8 BL07LSU フリーポート



サンプルとビームストッパー





Au (360 nm) / SiN (150 nm) メンブレン



FIB加工後のSEM写真

全てNTT-ATで金蒸着後の試料に金側から穴開け →SEM観察も金側からなのでメンブレン側は穴がこれより小さくなってい る可能性有り





E-Beam Spot Det Scan Mag FWD Tit 2 µm 10.0 kV 3 TLD-S H 2263 20.0 kX 5 516 0.0

sample#2 Φ=170nm, d=3μm

sample#3(a) Φ=680nm, d=9μm sample#3(b) Φ=350×480nm, d=9μm

ピンホールによる Fraunhofer 回折

ピンホール 10 µm

λ: 3.1 nm (400 eV) スリット: 100 μm × 100 μm カメラ長: 560 mm





BL07LSU : 2010.02.15 ~ 16 (6 + 0.5 shifts)

ピンホールによる Fraunhofer 回折

ピンホール 2 μm

λ : スリット : カメラ長: 3.1 nm (400 eV) 100 μm × 100 μm 560 mm



上流(S2) 水平スリットの Fraunhofer 回折



上流スリットの開口による Fraunhofer 回折をが観測される

Young Interferometer ダブルピンホールによる干渉

サンプル 3(a) スリット 100 µm × 100 µm



transverse coherence length : $\zeta = \lambda R / w$ $\lambda = 3 \text{ nm}, R = 10 \text{ m}, w = 100 \mu \text{m}$ $\zeta = 300 \mu \text{m}$: 非常に大きいコヒーレンス長が得られる



ダブルピンホールによる干渉

サンプル 3(a)

スリット 50 µm × 52 µm





SSRL との比較



Figure 9: Horizontal line cut plot of intensity vs. position from 7.

当たり前のことではあるが、BL07LSU の Visibility は高い。

ダブルピンホールによる干渉

サンプル 3(a) スリット 20 µm × 20 µm





ダブルピンホールによる干渉 垂直方向

サンプル 3(a)

100 µm × 100 µm



ダブルピンホールによる干渉 垂直方向

サンプル 2 スリット 100 µm × 100 µm



コヒーレンス測定実験のまとめ

十分なコヒーレンス長が得られることが分かった。

試料作製がきわめて難しい。 かなりの試行錯誤が必要。 50 nm 以下の加工には熟練が必要。

近い将来、集束イオンビーム (FIB) 装置を導入したい。

C より長波長では PF でも十分なコヒーレンス長が得られる。 例えば、 λ = 10 nm, 1m 上流の 100 μ m ピンホールを仮想光源とすると コヒーレンス長 ξ = 100 μ m

Use of coherent x-rays



Pd/Pt Shadowed Polystyrene LATEX



216 nm





Ferritin molecules - Single molecular imaging -





12 nm



Image reconstruction from speckles — Phase recovery —

Reconstruction from specikes (Phase recovery)



sample



Reconstructed image



reconstructed image

Au nano dots on SiN membrane λ =17Å coherent beam at X1A (0.1 µm diameter, 80 nm thick) (NSLS), 1.3·10⁹ ph/s 10µm pinhole 24 µm x 24 µm pixel CCD **Oversampling reconstruction**

Miao, Charalambous, Kirz, Sayre, Nature, 400 (1999)

Phase recovery



J. Miao et al, Phys. Rev. B 67, 174104 (2003)

Phase recovery test



Fienup Hybrid Input Output (HIO) algorism



5 μ m pinhole, λ = 1 nm

Courtesy Dr. Sebastien Harasse

今後の予定

- 1. NRA (Non Redundant Array), URA (Uniformly Redundant Array) を用いた空間コヒーレンスの定量評価
- 2. 軟X線フーリエ変換ホログラフィ (FTH) のテスト実験
- 3. Massively parallel holography (URA + FTH)
- 4. Coherent x-ray MAD imaging (FTH + MAD)
- 5. Keyhole coherent diffractive imaging (XCDI + Fresnel)
- 6. 3D diffractive imaging (XCDI + CT)
- 7. Phase contrast magnetic imaging

まとめ

コヒーレントX線散乱イメージング装置はほぼ完成した。

東大アウトステーションで Young 干渉実験を行った。

回折顕微鏡のテスト実験を行った。

今後はフーリエ変換ホログラフィ・回折顕微鏡の on site 解析の整備 と実験を行う。

【参考】 PF との使い分け PF BL-28B : $\lambda = 4 \text{ nm} \sim 10 \text{ nm}$ SPring-8 BL07LSU : $\lambda = 0.5 \text{ nm} \sim 4 \text{ nm}$

長波長では PF でも十分なコヒーレンス長が得られる。